

秋の夜長に



定年後 夫の故郷人來町に移ってから 私は自分のためにあれこれ首を突っ込むことが出来るようになった。自分の時間をたっぷり持てることは、なんと云つて幸せだろう。

中でも鶴田正義先生の短歌会「にしぎ江」に参加させて頂いていることは、喜びと誇りよりも感謝の思いである。不勉強の私だが、月一回の例会に先生をバス停まで車でお迎えする役を仰せつかつていて、いつかその思いは、私の宝になるに違いない。

先月の歌会を終えて階段を下りる途中で、四五枚の板の暮盤と暮白の箱を抱えた、夫と同じ年頃の大柄な男性とすれ違った。

私は「うわー」

「えっ、暮の会があるんですか」

と聞いた。へ、暮は私の趣味の一つなので、またまた悪い虫が動き出す。

「夜、暮の親子教室をやるんですよ」

彼は不足の暮盤を自費で買って来たのだと言ひ、私がパソコンで四千置いてやっていると言つて、彼は助手に来てほしいと言つた。「全くの初心者相手ですから助かります」

七時から九時までというので、私は二つ返事でOKした。その後ハツとその夜は我が家での若者と夫の飲み会あるのを思い出した。旺盛な若者達の食欲を満たすためには手作りの料理は欠かせない。餃子が好評なので大抵は百個ほど作るのだが、歌会と重なつたその日は、いいレバーが手に入ったので、時間の掛からないニラレバ炒めにする予定で、モヤシとニラを朝買いに行つていたのでした。

結局、私は囲碁教室の誘惑に負けた。客は七時半から十一時頃までいるのだから、急いで帰れば何とかなると、早速下準備に取りかかった。丁寧にレバーの血抜きをして、野菜もすぐ炒められるようにサ

ルに用意した。そして七時前、枝豆やおつまみに冷や奴をテーブルに並べて家を出た。

教室には若者が四五人、子連れのママさんが三組ほど、男女の中学生や小学生など二十人ほどが机に置かれた碁盤碁石をばさんで席に着いていた。行きつけの美容院の気のいいママさん助手も一人の子供と座っていた。

先生はかつての町一番の洋服店の主人で、夫の高校の一級上級生とのことだった。助っ人として顔見知りの男性も一人来ていた。黒板の前にはマグネットの大きな碁盤も用意されていて、本格的である。

既に二四回開催されていて、前半は先生の基礎的な講義、その後それぞれを相手に九路盤で打ってみる。私はいきなり同時に若者二人を相手にするようになると言われた。小さな盤に四子を置いての活き死の練習だから、当然局所的な戦いとなる。その二人は役場の地籍調査担当の職員で、現場での昼休みに問題集を研究しているのだそうだ。満更の初心者でもないの、私は一人に負けてしまった。しかし久し

ぶりの対局は結構楽しかった。

次回は普通の盤で、中学生に四子貴かせて打ったお父さん相手にやっているというその子は、勝負負けというよりは殺し専門というか、じゃんじゃん攻めて来る。地合では私が勝ったがなかなか勇ましい。美容院の小ーの子も右の取り方は分かっている。ハッパツと反応する。お母さんの話では碁のゲームソフトがあって、テレビの画面で出来るのだそうだ。

間違えるとフーと鳴って教えてくれるという。知らぬは年寄りばかりで、時代は進んでいるのだ。碁将棋なんて古くて廃れて行く連合隊かと思いきや、広く浸透していて、この分では全国から名人達人が輩出して、我が入来町からも出ることも夢ではないのかもしれない。

聞けば百人一首もソフトが出来ていて、それで覚えているといつ子もいた。恐れ入った話だが、考えてみると歌留多などは覚えればよいと言っただけの物ではない筈だ。

晴れ着を着て大勢が集い、みかんやキャンデーを

競ったお正月風景を思い出す。それも子供達だけでなく年寄りや親達も仲間に入っていた。今では五十年前のような凜然としたコミュニケーションは殆どないと言っていたら、我が町内には花見会や敬老会の軽い競技やビンゴがあるが、都市にはそれもないことだろう。ただ親子のスポーツ大会が残っているだけなのだろうか。

私も端末の前に座ってマーシャーンや暮をやることもあるが、それは単なる個人の気晴らしであって友達一人出来るわけでもない。戸外での子供の歓声が聞こえなくなつた今こそ、意識してお互いの繋がりを作り、大切にして行かねばならないと思う。今回の囲碁教室もあと一回で終了という。自分で碁盤の不足を補つてまでも、子供たちに暮の楽しさを教えよつと立ち上がった元居服屋のご主人に敬意を表したい。

皆で智慧を出し合つて、システム化し、今後も継続出来るようにしたいものだと思う。